

氏 名 久保 義郎 (くぼ よしお)  
学位の種類 博士 (学術)  
学位の番号 博乙第 33 号  
学位授与の日付 2026 年 3 月 17 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当  
学位論文題目 認知行動療法における「参加」指向的アプローチに  
関する研究 —ICF を活用した目標指向的リハビリ  
テーションに基づく支援の展開—

論文審査委員 (主査) 桜美林大学教授 石 川 利 江  
(副査) 桜美林大学教授 鈴 木 平  
桜美林大学教授 山 口 創  
文教大学名誉教授 今 野 義 孝

## 論文審査報告書

### 論文目次

第 1 章 序論	1
1.1 本研究の視座	1
1.2 認知行動療法の構造と課題	2
1.2.1 問題解決モデルの課題と支援の現状	2
1.2.2 「参加」を重視した支援視点の意義	3
1.2.3 CBT と「参加」概念の整合性	4
1.3 問題解決モデルと生活モデルの対比	4
1.3.1 問題解決モデルの特徴と課題	4
1.3.2 生活モデルの構造と展開	5
1.4 目標指向的アプローチ (GOA) の理論的位置づけ	5
1.4.1 GOA の定義と成り立ち	5
1.4.2 GOA の階層構造と心理学的応用	6
1.5 ICF の構造と心理学的支援への意義	7

1.5.1	ICF の基本構造と特徴	7
1.5.2	「参加」と「個人因子」の支援的応用	7
1.6	支援の視点と研究の枠組み	8
第2章	理論的枠組み	10
2.1	ICF の構造と「参加」概念	10
2.1.1	ICF の構造と意義	10
2.1.2	「参加」と「活動」の違い	11
2.1.3	個人因子のうち「価値」の役割	13
2.2	目標指向的アプローチの理論と構造	14
2.2.1	上田（1983）から大川（2003）への理論展開と構造化	14
2.2.2	生活モデルとしての枠組み	16
2.2.3	ICF と GOA の統合的視点	16
2.3	CBT との整合と補完関係	19
2.3.1	CBT の基本構造と ICF との接続可能性	19
2.3.2	CBT と GOA の共通点と相違点	20
2.3.3	CBT の展開としての ACT（価値概念と研究動向）	21
2.3.4	CBT を補完する参加指向的アプローチの 2 チャンネル構造（概念整理）	22
第3章	方法：参加指向的アプローチの構造と研究枠組み	26
3.1	参加指向的アプローチの構造整理	26
3.1.1	参加指向的アプローチの構造と特徴	26
3.1.2	CBT と GOA の統合的構成枠組み	28
3.2	面接における目標設定の進め方	29
3.2.1	価値・参加・下位目標の階層構造	29
3.2.2	面接における目標設定のプロセス	30
3.3	本研究の研究構成と適用モデル	31
3.3.1	研究 I ～IV における参加指向的アプローチの適用原則	31
3.3.2	各研究の目的と比較構造	32
第4章	研究方法	35
4.1	研究デザインと実施方法	35
4.2	対象者の選定基準とデータ収集方法	36
4.3	分析方法	36
4.3.1	ICF による構造分析	37
4.3.2	再帰的テーマ分析	37
4.3.3	分析における透明性	39
4.4	研究における倫理的配慮	39

第5章 参加指向的アプローチの適用事例と分析	40
5.1 研究Ⅰ：リハビリテーション領域への適用事例	40
5.1.1 脳外傷の事例1	40
5.1.2 脳外傷の事例2（他の心理職による実施）	48
5.1.3 脳外傷の事例3（他の心理職による実施）	52
5.1.4 脳性まひの事例	55
5.2 研究Ⅰの考察	59
5.3 研究Ⅱ：心理療法領域への適用事例	59
5.3.1 不登校・引きこもりの事例1	59
5.3.2 不登校・引きこもりの事例2	65
5.3.3 発達障害・知的障害の事例1	68
5.3.4 発達障害・知的障害の事例2（母親による実施）	72
5.3.5 発達障害・知的障害の事例3（担任教師による実施）	76
5.4 研究Ⅰ・Ⅱにおける共通の特徴と支援結果の整理	80
5.5 研究Ⅱの考察	80
5.6 研究Ⅰ・Ⅱの総合考察	81
第6章 参加指向的アプローチの有効性に関する検討と従来モデルとの比較	83
6.1 研究Ⅲ：支援結果の比較検討	83
6.1.1 参加目標設定の有無と差異（行動変容がみられた事例）	83
6.1.2 本アプローチの適用限界と課題（行動変容がみられなかった事例1）	90
6.1.3 本アプローチの適用限界と課題（行動変容がみられなかった事例2）	96
6.1.4 行動変容がみられた事例・みられなかった事例の比較検討	101
6.2 研究Ⅳ：参加指向的アプローチと従来モデルの理論的・実践的比較	101
6.2.1 参加指向的アプローチと問題解決モデルの理論的差異	101
6.2.2 実践事例比較による具体的示唆	102
6.3 参加指向的アプローチにおける効果要因と課題に関する考察	103
6.3.1 価値の明確化と参加目標の具体性の2軸による事例の整理	103
6.3.2 価値への問いに対する語りのパターンと2軸との対応	104
第7章 参加指向的アプローチの理論的再評価	107
7.1 事例分析から得られた知見	107
7.2 GOAの理論的独自性と参加指向的アプローチへの貢献	107
7.2.1 GOAの構造的特徴	107
7.2.2 GOAと参加指向的アプローチの統合的意義	107
7.3 参加指向的アプローチの理論的貢献と実践的意義	107
7.3.1 理論的貢献	107
7.3.2 実践的意義	108

7.4	心理療法の多様性と統合の可能性	108
7.5	価値・参加・活動を基軸とした心理療法の理論的比較	109
7.6	参加指向的アプローチによる心理療法の部分的統合の可能性	112
第8章 結論と今後の展望		114
8.1	本研究の理論的総括	114
8.1.1	ICF・GOA・CBTの統合的理解	114
8.1.2	参加指向的アプローチの理論的枠組みと構造	114
8.2	研究I～IVから得られた実践的示唆	115
8.2.1	研究I～IVから得られた実践結果と展開	115
8.2.2	汎用性と応用の可能性	115
8.3	今後の課題と展望	116
8.3.1	理論的課題（支援構造・分類・測定など）	116
8.3.2	実践的課題と今後の研究の方向性	117
第9章 総合的結論		119

## 引用文献

# 論 文 要 旨

本論文は、心理学的支援を価値にもとづく生活参加の促進のための理論的枠組みを提示し、心理学および支援実践に重要な示唆を与える研究である。国際生活機能分類（ICF）および目標指向的アプローチ（GOA）を理論的基盤に据え、認知行動療法（CBT）を統合した「参加指向的アプローチ」を提唱し、その有効性を理論的・実践的に明らかにしている。従来の認知行動療法（CBT）を主とした支援では、症状の軽減や問題行動の改善に焦点が当てられることが多く、クライアントの価値や生活全体・社会参加との関連が十分に扱われてこなかったという課題がある。これに対し本論文は、生活機能モデルであるICFの視点を導入し、クライアントの価値を起点として目標を設定し、その目標を通じて生活場面への参加を促進することを支援の最上位目標として位置づけ、心理学的支援の枠組みを再構成することを試みている。

第1章では、問題解決モデルおよびCBTを中心とした従来の心理学的支援の特徴と限界を整理したうえで、ICFおよびGOAの概念を概観し、価値にもとづく参加を重視する支援視点の必要性を論じている。症状や認知の変容のみを目的とする支援では、クライアントの価値や生活の意味づけが十分に反映されず、生活の質や社会的役割の回復につながりにくい点を課題として提示している。

第2章では、ICFの構造と「参加」概念について詳細に検討し、「心身機能」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」という構成要素の相互関係を整理した。また、GOAの理論的背景と階層構造を明確化し、ICFとの概念的整合性を示している。さらに、CBTがもつ価値志向的側面や行動活性化の考え方が、GOAおよびICFと理論的に接続可能であることを論じ、統合的支援モデルの理論的基盤を構築している。

第3章では、「参加指向的アプローチ」の構造モデルを提示し、ICFとGOA、CBTを統合した支援プロセスを体系化している。本アプローチでは、「本人がどうありたいか」「何を大切にしたいか」といったクライアントが大切にしている価値を起点として参加目標を設定し、そこから活動目標、さらに心身機能への支援を逆向きに設計する点に特徴がある。これにより、支援が課題解決や症状改善にとどまらず、価値に根ざした意味ある行動変容および生活参加へとつながることが理論的に示されている。

第4章では参加指向的アプローチによる研究デザインと方法について述べている。ICFによる構造分析および再帰的テーマ分析を用いて、支援過程とその意味構造を検討する分析枠組みが示されている。

第5章および第6章では、複数の事例について共通のフォーマットを用いて、参加指向的アプローチの効果と構造の有効性について検討されている。異なる領域・文脈における適用実践、支援対象や支援者、支援機関といった実施条件が異なる条件、行動変容が見られた事例と行動変容がみられなかった事例の比較分析など実践的比較に関する理論的検討が行われている。価値にもとづいて参加目標を明確に設定することで、クライアントの主体性や動機づけが高まり、支援の効果が生活全体へと汎化する可能性が示された。

第7章では、本論文の理論的意義として、ICFとGOA、CBTを統合し、価値を起点とした参加促進モデルを体系的に提示した点について論じられている。また、実践的意義とし

て、医療・福祉・心理支援の多職種連携において、価値と参加を共通言語として支援を再構成し、従来の問題解決モデルを維持しつつ、参加を頂点とする価値基盤の階層モデルを並走させる可能性が示唆されている。

第8章では、ICF およびGOAの枠組み、ならびにCBTの技法体系との関係を理論的に総括したうえで、得られた実践的示唆、汎用性と応用可能性、今後の課題と展望が提示され、本アプローチの特徴と意義を整理している。

最終章では、参加指向的アプローチは、価値→参加→活動という階層設計に加え、価値と参加目標が生活文脈で保持されるように支援過程を構成し、環境調整と支援関係を組み合わせて運用することに依存することを、事例分析から得られた到達点としてまとめている。

## 論文審査要旨

本論文は、心理学的支援における「参加」を中核概念として、国際生活機能分類（ICF）および目標指向的アプローチ（GOA）を理論的基盤に据え、認知行動療法（CBT）を統合した「参加指向的アプローチ」の構造と有効性を検討した研究である。従来の認知行動療法に基づく支援が症状軽減や認知変容に主眼を置いてきたのに対し、本研究は生活文脈や社会参加を支援の最上位目標として再定位しており、明確な問題意識と独創性が認められる。

理論的検討においては、ICFの「参加」概念とGOAの階層構造を精緻に整理し、CBTの価値志向的側面との統合可能性を体系的に示している点が高く評価できる。また、ICFによる構造分析および再帰的テーマ分析により、提示した理論モデルの妥当性を事例に基づき実証的に検討しており、方法論上の手続きも概ね適切である。一方で、事例数や量的データの規模には一定の制約があり、結果の一般化には慎重な解釈が求められるが、これらの限界は論文中で適切に言及されている。さらに、理論的枠組みの構築と実践事例の精緻な分析を通じて、今後の量的研究や他領域への応用に向けた明確な研究課題と展望が示され、実践現場において再現可能性の高い視点と方法論が提示されており、実務的観点からも高く評価できる。

以上のように、本論文は従来モデルの詳細な検討に基づき、新たなアプローチを体系化して提示したものであり、学術的・実践的意義が高く、博士論文として相応しい水準に達していると判断された。

## 口頭審査要旨

公開での最終審査は、30分間の論文概要の発表、30分間の質疑応答の後、非公開にて主査および副査による合否判定が行われた。発表においては、パワーポイント資料を用いて、本研究の背景、目的、理論的枠組み、ならびに事例分析を中心とした研究成果について、全体像が簡潔かつ明瞭に説明された。

質疑応答では、参加指向的アプローチにおけるセラピストとクライアントが「安心・安全・信頼」に基づく関係性の中で語りを生成していく過程と支援者要因の位置づけ、客観

的指標によらない効果の捉え方、価値の明確化を重視する ACT などのアプローチとの相違点、ならびに本研究の今後の発展的展開について質問やコメントがなされた。これらに対し、申請者は本研究の理論的枠組みと分析結果を踏まえ、研究の限界と今後の課題を適切に整理しつつ、将来的な研究展開の方向性を含めた的確な回答を行った。

本論文は、狭義の自立や問題解決にとどまらず、クライアントの主体性と価値を重視し、支援者とクライアントがともに意味を発見していく新たな支援の在り方を理論的・実践的に提示したものであると高く評価された。以上の審査結果を踏まえ、主査・副査一致した意見として、本論文は博士論文としての水準を十分に満たしており、本学位論文として合格と判断された。

以上